

# ぶらりわが街宮沢界限

## (30)戦後のまちづくり—復興から今 —III—

○ 産業の復興→建設業界の発展→多摩川砂利採取(じやりさいしゅ)需要増→社会問題禁止

昭和飛行機工業(株)を中心に発達してきた市域の工業は、戦後多くは廃業し平和産業への転向した企業も、資材の不足から困難な経営を続けていました。このような企業に代わって建設業界が大きく発展しました。これは、立川飛行場に駐留(ちゅうりゅう)した米軍による、立川基地強化の拡張工事などの増大によるものでした。特に昭和25年(1950)6月25日、「朝鮮戦争」が始まると日本は、連合軍の兵站(へいたん)基地となった。兵器・車輛の修理・建物の建設などの特需(とくじゅ)が相次いだ。1950年~55年の特需契約高は16億ドルを超え、戦後の経済不況に落ち込んでいた日本経済は活気を取り戻し、急激な経済発展のきっかけとなりました。

昭和23年(1948)、昭和町の建設に従事者は、六千二百五十七人で製造業の二千五十五人を大きく引き離し、町全体の就業者の半分を占めるほどでした。

戦争末期の空襲(くうしゅう)によって焼失(しょうしつ)されてしまった、首都をはじめとする都市の再建や住宅不足を解消するための建設ラッシュにより、砂利の採取も盛んに行われました。

多摩川河原からの砂利採取は、明治中期から始まり、品質の良さ=「幾多の洪水で集落を流出させた強烈な豊かな流れ」および首都に近さから、大正時代から戦前まで馬や引込線を使って運び出し、鉄道により東京を中心に都市に送られていました。戦後、コンクリートによる建設が伸びるとともに、需要が増え市域などの河原には採取した跡の大きな砂利穴が至る所にできてしまい、さらに運び出しのトラック輸送は深刻なダンプ公害を生み、また昭和32年(1957)6月、上流の小河内ダム完成は、流れがかつてのような良質な砂利の採取が不可能となり、39年(1964)9月、青梅市万年橋より下流部での採取は禁止され、多摩川の砂利採取は終了した。

○ 八清(はつせい)住宅地の戦後→新しい商店街ができる

八清住宅地は陸軍航空工廠(こうしょう)(旧名古屋工廠)の従業員のため、建設された集団住宅街であったが、航空工廠が昭和20年(1945)9月4日解散により、20年11月10日八清住宅(約六百戸)の所有権が、管理者の八日市屋清太郎から住宅営団東京支社が引き受け経営することになり、都内都下各地の戦災者約四百所帯に提供。28年(1953)八清住宅繁華街から玉川小学校に至る「八清大通り」完成。28年9月6日昭和町議会に八清住宅を住宅営団から昭和町が払い下げる事業を提出。その後、市有住宅を居住者などに売り渡す契約が成立していきました。

戦後の混乱を抜けだし、人口の増加と産業の復興により、青梅線の利用客数も23年(1948)には大幅な増加があり、駅周辺には商店が次々にできるようになり、特に八清の地域には市場ができ、それを中心に新しい商店街ができあがり、映画館まであり近隣の人々の集まる繁華街としてにぎわうようになり、中神駅・西立川駅・昭和前駅(現昭島駅)などの周辺にも新しい商店がつくられ、次第に街のにぎわいが生まれ、近郊都市としての復興が始まりました。

業種	人員	業種	人員
農業	975	商業	569
林業	7	金融業	102
水産業	23	運輸通信業	464
鉱業	28	サービス業	223
建築工業	6,257	自由業	226
製造工業	2,055	公務団体	515
ガス・電気・水道業	102	その他の産業	957
人員総合計		12,507	

昭和町産業別就業者調査(昭和23年) 昭和町誌より

記

防犯宮沢支部

西山 禎一



宮沢町の砂利採取(林野部科所) 昭和23年10月 昭和町誌より



八清住宅街(昭和28年10月) 昭和町誌より

